

近世畿内の在地代官と家・村 ― 類型化の試み ―

熊谷光子

はじめに

本稿で取上げる在地代官とは、畿内・近国の旗本知行所を中心に近世中期以降簇生する庄屋あがりの代官をいう。⁽¹⁾ 彼らは、庄屋である間は当然百姓であったが、領主から代官＝武士に取立てられた段階で、苗字帯刀が免許され、あわせて宗家人別も本人のみ別帳が仕立てられる。その際、百姓＝庄屋としての家督は、後継者に譲ることが求められる。また武士として村に居住するためには、京都や大坂といった町奉行所に届け出て（以下町奉行所とのみ記す）、登録・免許される必要があるであった。つまり彼らは、家として武家に取立てられたのではなく、あくまでも本人のみ一代限りの取立てで、その場合、百姓経営からは身を引くこと、またもし百姓時代に関わる訴訟が町奉行所において起こされれば、元の百姓身分で臨むことが条件であった。代官への登用によって、当人は武士になるものの、家族や過去に遡って身分変更が行われたわけではなく、家の百姓経営も何ら変わることなく続けられたのである。

一九世紀中期以降の畿内・近国の旗本知行は、事実上こうした武士化した元庄屋たちによって支えられていた。表1は、史料の上で確認した在地代官の一覧である。例えば旗本根来氏の場合、三四五〇石取りの比較的大身の旗本であったが、知行所は近江・大和二ヶ国に分かれ、さらに近江では三郡にまたがっていた。その場合、知行所の中にはに位置する蒲生郡東老蘇村に陣屋がおかれ、その村のトップクラスの百姓坪田氏が、元禄期以来代々代官に任命されて近江知行所の支配にあたっていた。しかし一八世紀後期に村方騒動がおき、知行所不帰依のために坪田氏が一時罷免されて以降は、騒動の中心にあった庄屋がかわって代官に登用され、加えて、福永・岩田氏といった他郡の庄屋からも代官が任命されるようになる。以後近江知行所では、入れ替わりながら常時二・三名の代官が置かれるが、こうした数名の在地代官による支配という状況は、大和知行所でも同じであった。これに対し、石川氏の本家・分家の場合、当初は江戸から派遣された代官が支配にあたっていたが、安永期を境に在地代官に転換し、その際石川分家の方は一名から三名に増員されている。また旗本鈴木氏の知行所のように、近世を通じて代官未設置であったものが、幕末期になつては

表1 在地代官一覧

旗本名(知行石高)	知行所所在地(石高) [支配形態]	在地代官名	就任時期	備考
根来(3000石)	近江愛知郡・蒲生郡・ 野洲郡8カ村(2200石) [陣屋] 大和宇智郡9カ村 (1250石) [陣屋?→代官役宅]	(坪田恒右衛門) 林又兵衛 福永所左衛門 杉原衛守 杉原準平 (大林与八) 岩田長兵衛 松山庄左衛門 右馬理兵衛 (辻本惣左衛門) 吉岡欣十郎 遠山龜之助 森本儀右衛門(八郎) 森本富士太郎 (辻本新左衛門)	元禄15~文化8 天保期~ 文化8~文政期 文化末~文政初 嘉永3以前~ 文政8~ 文政末~ ?~嘉永3 嘉永3以前~ 文化10以前~13 " ~14 文化13~文政期 ? ~天保2 天保初~14年以降 天保2~嘉永3 嘉永2~3 嘉永2~嘉永5	東老蘇村に居住、知行所の不帰依 により退役、文化時2町5反余 坪田恒右衛門の後任、元東老蘇村 庄屋 元下中野村庄屋、以後代々庄屋・ 代官に著任、文化8年に20石余 元東老蘇村庄屋 杉原衛守弟 老蘇村居住 元嘉波沢村庄屋、4町3反余 出奔により退役 元黒駒村庄屋 知行所不帰依によ り退役 丹原村居住 大野村居住、急死により退役、 11石6斗余(すべて小作) 黒駒村居住 元大野村庄屋、吉岡欣十郎跡役、 知行所金取込容疑で退役、村弘 元大野村庄屋、代官見習中に村弘 病氣を理由に退役
鈴木(分家、200石)	摂津嶋上郡高浜村1カ村 (200石) [代官役宅]	西田半右衛門	弘化2~安政4	元高浜村庄屋、以後も代々庄屋 明治4年に59石余
石川(本家、下館藩 2万石)	河内古市郡・石川郡22カ 村(7000石) [蔵屋敷-陣屋]	松倉直右衛門 (玉手文右衛門) 他数名	安永3~寛政4 安永3~?	江戸勤番代官の後任、元碓井村庄 屋、以後代々大庄屋・代官に著任 石川分家方代官兼任 江戸勤番代官の後任
石川(分家、3000石)	河内古市郡・石川郡10カ 村(3000石) [陣屋→代官役宅 →陣屋]	壺井佐助 塩野千助 坂口武右衛門 城戸文治	(安永5~) (安永5~天明3) 享和頃~ 寛政12~文政5 文政7~幕末	江戸勤番代官の後任、元葉室村庄 屋・大庄屋、以後代々郷目付・代 官に著任 江戸勤番代官の後任、元新町村庄 屋・大庄屋、以後代々郷目付・大 庄屋・代官に著任 元新町村庄屋 下河内村居住、以後郷目付・代官 郡代に著任
船越(5638石)	摂津川辺・豊島郡7カ村 (2638石) [蔵屋敷-代官役宅] 河内交野郡3カ村(1500石) ["] 大和宇智郡5カ村(1500石) [蔵屋敷-用場→ 蔵屋敷-代官役宅]	広田八郎 (福田宗蔵)他 田中五兵衛 中井庄兵衛 (家村土兵衛) 他 北厚治 (高島丈太郎)	文政1以前~幕末 嘉永5頃~万延頃 享保13以前~明和9 明和9~幕末 安政4頃~慶応1 嘉永2以前~安政4 安政4~	元上坂部村庄屋、東・中・西3家か ら断続的に代官輩出 七松村居住 江戸勤番代官の後任か、元楠葉村 庄屋、勘定滞りにより退任 楠葉村居住、元大庄屋、以後代々 代官に著任 招提村居住、村方より退身願 元御山村庄屋 山陰村居住
青山(幸正系、 主水方、2050石)	摂津武庫・川辺・嶋上郡 7カ村(2050石) [代官役宅?]	(笹屋弥七) (前田重郎左衛門) (田中勘右衛門) 橋本藤左衛門 松本市左衛門 西田勝一郎 (沢田伊左衛門) 三根治郎左衛門	?~寛政2 寛政2~? 寛政2~? 文政3~天保初 天保2~ 天保14以前~安政2 嘉永7~6 安政6	富田村居住、郷中一統不帰依によ り退役 中村居住、以後とて代官、天保 下坂部村居住、文化4年に27石弱 同村元庄屋(佐助)、"に10石余 上大市村居住、代々代官 元下坂部村庄屋、上納金拒否によ り解任、欠所村払い、安政2年に 44石余 下坂部村居住、相知方代官兼帯 村方不帰依により退役 元下坂部村庄屋、代官心添役不調 法により退役、安政3年に37石余
青山(幸高系、 監物方、700石)	摂津武庫・川辺郡3カ村 (700石) [代官役宅]	植村瀧右衛門 沢田伊左衛門・猪兵 衛	享和2~文政9 文政9~	元武庫郡中村庄屋、2代代官、私 米不正を村々より訴えられ解任 元下坂部村庄屋、以後3代代官

在地代官名で()を付した者は、元庄屋であることが史料の上で確定できなかった者。

なお根来氏知行所については中家文書・福永家文書・杉原家文書・鈴木氏知行所については西田家文書、石川本家・分家方知行所
に関しては、『羽曳野市史』及び松倉家文書・渡辺家文書・塩野家文書・船越氏知行所については中井家文書・広田家文書・徳永
家文書、両青山氏知行所については、沢田家文書・三根家文書を参考にした。

じめて新設され、それが在地代官というものである。近世中期以降の在地代官Ⅱ後期型在地代官の一般化は、それまでの世襲代官Ⅱ前期型在地代官や江戸から派遣されていた家来に取って替る形で、また代官の増員あるいは新設という流れの中で進行していったのである。以下、本稿で考察の対象とするのは、主に後期型在地代官についてである。

ところで近世の摂河泉播四力国には、二〇〇を越える旗本知行所や大名領の飛地および公家領・寺社領が錯綜していた。数百石からせいぜいが五千石以下の中小の知行所（所領）では、こうした在地代官が、国毎あるいは郡毎に一名ないし二名程度置かれ、知行所の中でも村高が大きく、地理的にも中心に位置する村の庄屋が主に登用される。それに伴い、支配役所も、当初は陣屋・用場を設けていても、経費の問題等からそれらを引払い、在地代官宅を役所として使用するケースも散見される。その際役所から荷物が引き継がれるが、その一例を示したのが表2である。知行所や代官の判断により異同はあるが、共通するのは、宗主人別帳や江戸との間で取り交わされた御用状の草稿、村々の願書留類で、さらに印判・紋付提燈・手鎖・十手・捕縄、検見の際の坪升等といった道具類も確認できる。高付帳や免定の雛形や下書（「形板」・「下組」）、検見の坪升等は、彼らが年貢の免定を実質的に作成し、収取を担当していたことを示し、また手鎖以下の道具類は、在地代官が知行所内で一定の裁判権を持っていたことを示すものである。しかし一方で、ここには、庄屋文書の中に必ずみられる検地帳・名寄帳の類は一切なく、勿論年貢割付帳・村入用帳もみあたらず

い。庄屋とは明らかに異なる知行所レベルの文書群・道具類が、支配役所としての在地代官家には引き継がれたのである。

そうした知行所代官の任務をまとめると、おおむね次の三点になる。第一に「収納方」すなわち年貢収納事務および知行所経営で、第二に「郷中政道」と表現される知行所の取り捌き、そして第三が京都や大坂等畿内の町奉行所との対応・折衝を指す「公用勤向」である。いずれも庄屋Ⅱ百姓ではなく、代官Ⅱ家来が好ましいか、代官Ⅱ家来でなければ対応できない機能で、先の代官引き継ぎ荷物に即応した任務である。またこの代官の三つの勤め向きの内容は、近世中期以降いずれの知行所においても大きく転換する。登用の直接の契機は知行所により異なるものの、こうした支配内容の転換が、それぞれに適應できる代官を要請したことによって、在地代官の一般化は説明できる。

以上が主として代官個人に注目することによって得られた成果である。これにより、知行所支配において彼らが庄屋Ⅱ百姓でなく代官Ⅱ武士でなければならなかった理由は、一定明らかに became となったと考えるが、その一方で、それが庄屋でなければならなかった理由、また庄屋にとって在地代官に取り立てられることの意味についての検討は不十分なままである。⁽²⁾そこで以下、視点を在地代官個人だけでなく代官を輩出した家に転じ、そうした家とはそもそも村の中ではどのような存在であったのか。それが代官に任命されたことで、どのように変化を遂げたか、あるいは逃げなかったのか。そして庄屋家にとって在地代官を輩出する意味とは何であったのか、といった点をみていくことにした

表2 代官引継ぎ荷物

文政9年青山主水方知行所 「代官より引送り品々」	嘉永2年船越氏大和知行所 「御用場取払後預り御用物品数帳」	安政4年船越氏大和知行所 「代官御用物之内引渡目録」
3か村宗旨帳・人別増減帳 江戸奉公人給米・人別帳 3か村免定下組 年貢勘定目録 3か村年中諸入用割賦帳 諸願書(樋池普請願帳・仕様帳)・届 江戸表より書状・報書の控 知行所3か村へ規定書 検見坪舁、但1間2寸角4本 手鎖、但鍵共 両掛け・合羽籠 鍵ことし供差大小 合羽・看板 飛脚通 絹風呂敷	5か村1ヵ年分宗旨帳 銀納割方控帳 取箇帳控 当年村々より差出候書付類 用書下案 触書 日記 文通留 手鎖・捕縄 印判、封印共 御状箱 両掛け1荷 鉄刀・木刀、大小 弓張・小田原・高張提灯 人足火事笠・胸当・羽織 看板・同古 古箏筒 跡付 御槍印 古乗駕籠 和州5か村碁盤絵図 御林松木入札一件書類 屯倉掛け銀書上帳 関羽掛け物	5か村宗旨帳、家出・帳外留 免定形板 用書草稿 日記 文通留 手鎖鑰共・十手房共・捕縄 印判、押切封印 御状箱 木刀、大小脇差 紋付・小田原提灯 足軽火事具・小者火事笠・法被 単半合羽・袷合羽等・長看板 御用小箏筒

沢田家文書2-120・国立史料館所蔵高嶋家文書23・24より作成。

い。その際在地代官家を、相続の状態から三つに類型化して考察を進める。一つ目は、代々代官に任用され、ほとんど世襲状態にある代官家Ⅱ世襲される代官家であり（この場合のみ前期型在地代官を含む）、二つ目は、知行所運営の不安定さから頻繁に交替を繰り返す代官家、三つ目は、いずれの可能性も持つところの世襲化をめざす代官家である。なお在地代官が庄屋あがりであったことに示されるように、在地代官家の考察は、実質的には（元）庄屋家の考察ということになる。在地代官を生み出すことを、近世後期の庄屋家の一つの運動のあり方と捉え、以下論を進めていくことにする。

まずは、在地代官を輩出した家の阿極にある事例を二つ紹介する。一つは代々代官に任用され、世襲状態を現出していく代官家Ⅱ世襲される代官家であり、今一つは、頻繁に交替を繰り返す代官家である。おかれた状況によって全く異なる道をたどる在地代官家が、ここからはみえてくるはずである。

一 世襲される代官家

―旗本船越氏（摂津・河内・大和五六〇〇石）在地代官中井家の場合―

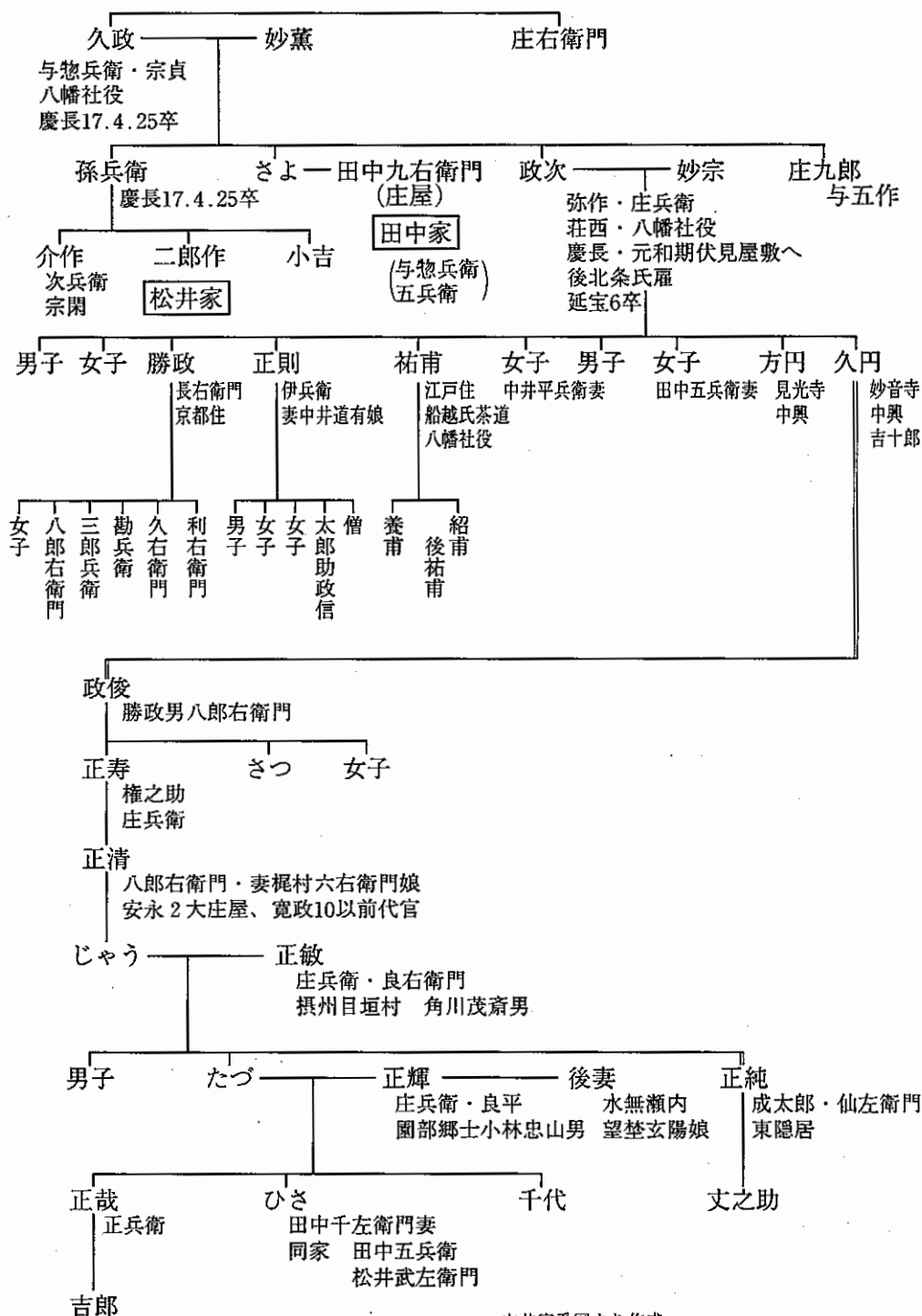
（1）中井家

まず最初に取り上げるのは、旗本船越氏の河州代官を代々勤めた中井家の事例である。船越氏は、摂津・河内・大和三ヶ国に合せて五六〇〇石の知行所を持つ旗本で、河州には交野郡内に三か村一五〇〇石

を知行する。中井家のある楠葉村は、村高二四〇〇石余の大村で、うち五〇二石を慶長期から船越氏が、残りを淀藩・旗本永井氏・幕府・大坂城代領等を経て、天明五年以降は再び幕府が領した。相給形態は不明ながら、居住空間は一定区分されていたと考えられることから、ここでは船越氏知行所に限定して、中井家の村Ⅱ知行所村における立場を確認することからはじめたい。

図1は、中井家の系図である。そもそも中井家とは、楠氏の系譜を引き、「河内国二而人も存たる」と自ら語るほどの土豪の由緒を持ち、代々駒形神人長職という石清水八幡社役を勤める家柄であった。⁽⁴⁾その中井家の近世は、与惣兵衛久政と長男の孫兵衛が慶長一七（一六一二）年に共に死没したことから、実質的に政次庄兵衛（以後莊西と呼ぶ）から始まる。莊西は、相続前後から船越氏家来、狭山藩北条氏家来を歴任したが、少なくとも亡くなる延宝六（一六七八）年までには、子供たちに土地を分与し、また三男祐甫には石清水八幡宮の神人職を譲っている。ちなみに祐甫も後に船越氏茶道として家来に取立てられ、江戸に移住する。⁽⁵⁾ただ莊西による株分けの詳細は不明である。断片的に分かっているところでは、祐甫の二人の息子（茶道）には宝永二（一七〇五）年に二四石余が、また四男方円（中井家が一七世紀中興した見光寺住持）には、莊西譲り・買得による七石余と、享保三（一七一八）年には先の祐甫の二四石余が譲渡され、次男の政則伊兵衛にも高は不明ながら分与されている。⁽⁶⁾本家を相続した久円（後中井家中興の妙音寺住持）の所持高は不明であるが、三〇石を越える土地が

図1 中井家系図



中井家系図より作成。

—— は実子、—— は養子であることを示す。

分家の手に渡ったことから考えて、それを下らないものと予想される。ただし久田あとの本家は、京都に移住した長男勝政（京都で仕官か）の長男八郎右衛門が相続し、それ以後は基本的に単独相続が行われる。その中井本家からはじめて代官となったのが、正清八郎右衛門で、以後断続的に中井家当主が代々河州知行所の代官に登用されていく。

ところで莊西の姉は同じ楠葉村船越方の田中家に嫁いでおり、莊西の三女も同家に嫁している。この田中家というのは、一七世紀中は庄屋を勤め、享保一三年以前に船越氏知行所ではじめて「地方役」と呼ばれる在地代官に取立てられた家である。⁽⁷⁾ しかも同家は、もともと中井姓を名乗り、⁽⁸⁾ 莊西の親の名前である与惣兵衛を襲名していることに示されるように、中井家とは深い関係にある同族であった。これ以外に、莊西の長兄孫兵衛家も松井家として存続しており、この二家と中井家は、系図の最後にみえるひさの縁組からも明らかのように、幕末まで親密な関係が保たれている。

以上から、中井家については、中世以来の土豪の由緒を持ち、近世初期には武士を輩出する小領主的な家であったが、本家として村に土着する過程で土地の分与や婚姻関係を通じて分家を創出し、一門を形成した家とみなすことができる。一八世紀に誕生した船越氏の在地代官は、こうした中井本家およびその一門である田中家から代々輩出されていたのである。

(2) 一門

では中井本家と一門の関係とは、具体的にどのようなもので、一門は村々知行所村に対しどれほどの影響力を持っていたのだろうか。

まず村役人という点から見えていく。中井一門の村役人としての経歴は、確実なところでは、元禄—宝永期に田中与惣兵衛が庄屋を、正俊八郎右衛門が年寄を勤め、享保—延享期には一門と思われる清七が庄屋を、宝暦—明和期には当主庄兵衛（中井正寿か）が年寄を、また寛政期には、中井姓を名乗り「親類惣代、同村末家」と肩書きのある仙助が庄屋を勤めていたことが確認できる。⁽⁹⁾ また船越氏知行所では、安永—寛政期に一時的に大庄屋二名が認められるが、そのうちの一人が中井家当主で後の代官正清八郎右衛門であった。⁽¹⁰⁾ これらのことから、中井本家は代々村役人の家筋であったというよりは、むしろ分家に村役人を勤めさせ、村役人に欠員があったり、知行所を代表する大庄屋といった時に、はじめて表舞台に顔を出す立場にあったものと理解できよう。

また土地をめぐる本家と分家の関係をよく示すのが、宝永二（一七〇五）年祐甫の二人の息子と一門の間で取り交わされた一札である。⁽¹¹⁾

内容は、中井本家から二人に対し二四石余の田地を分与するが、「莊西公之遺物」なので、今後その田地は「爰元一家中二而支配」を行い、二人にはその「作徳」のみを遣わす。もし子孫に至って「身体之障り」があるうとも、田地は「必堅ク為売申問敷」ように、というものであった。署名者は、「見光寺方円坊・田中五兵衛・中井伊兵衛・中井八郎右衛門・田中与惣兵衛」の五名で、順に莊西四男、在地代官田中氏、

莊西次男、久円あとの中井家当主、そして当時庄屋の田中与惣兵衛である。祐甫家を含めて、この五家がこの時点での中井家「一家中」と考えられ、莊西より伝来の土地を可能な限り守り伝えていくことが、彼らに与えられた使命であつたことがうかがえる。

またこうした一門の存在は、中井家が中興した見光寺・妙音寺をめぐつても確認できる。次の史料は、妙音寺が京都本満寺と元禄五年に本末關係を結んだ際に、本満寺役者から遣わされた書状の追伸部分である。⁽¹²⁾

猶々御願望之通、諸役免許ニ致可申候、且又後住之儀、いかにも御縁類御居之段可然存候間、弥末寺ニ相極申候間、左様ニ御心得被成御申可被下候（傍点筆者）

傍点部分は、これに対する妙音寺住持久円の返書では、「後々住持之義、一類持ニ御究忝奉存候」と言い換えられており、一門持ちの寺院であることが本寺から認められたことが知られる。しかもこのやりとりの内容は、「一門衆中」と並んで「村之衆中」に対しても報告されている。また見光寺が享保三年以降所持することになった三一石余の管理についても、方円坊自らが、「清七・庄兵衛・万右衛門右三人江年替りに支配頼置候」と記し、⁽¹³⁾見光寺の土地管理が、実質的には一門の手によつて行われたことが明らかである。以上から、中井本家と二つの中興寺院を含む中井家分家は、それぞれに独立した経営を行つてはいても、それを取り囲む形で常に一門による経営支援体制が整っており、分家に譲られた田地も、二つの住持職も、一門で支配し受け継

いでいくべきもの、という認識が、村の中でも中井一門の者にも共有されていたことになる。

なおこうした一門の存在は、形を変えながら、一八世紀末段階でも確認できる。

相渡申書付⁽¹⁴⁾

一亡師惠雲存寄二付、中井正兵衛殿分ケ株中井伊兵衛株役地半分、先達而譲り遣シ被置候所、此度拙僧致隠居候二付、本家中井氏江遂相談、伊兵衛株之分不残其方支配人ニ申付候、後向何事ニ不寄、本家中井氏蒙御下知ヲ、少茂致違背間敷候、万一於違背者、早速株役本家中井氏江取上可申候、後向本家中井氏江励忠節相勤可被申候、仍而申渡条如件、

寛政元酉十二月^(一七八九)

西法寺隠居

惠寂 印

太兵衛江

前書分ケ株之義、惠寂比丘西法寺隠居有之候上者、此方江戻り株ニ可相成処、太兵衛義者難見捨因縁之者二候間、右株支配人ニ相定、高役万端太兵衛ニ勤させ度候由、相談有之候付（後略）

これによると、莊西の次男伊兵衛家は、一八世紀段階ですでに絶家となつていたが、田畑は「伊兵衛株」として存続し、その半分が西法寺住持惠雲及び弟子の惠寂に伝えられていた（一門との關係は不明）。しかし寛政元（一七八九）年の惠寂の隠居に伴い、本来は本家へ戻り株となるべきところ、太兵衛が「難見捨因縁之者」であるため、新た

に株支配人とし、以後本家の下知を仰ぎながら「高役」を勤めさせることにする、としている。

この他にも、明和九（安永元年、一九七二）年に楠葉村の年貢勘定滞りのために、田中家が土地を手放さなければならなかった際、九石余を村の「御百姓中」に、八石弱を中井本家や西法寺が買い上げた証文が中井本家に残されており、また祐甫から見光寺に渡った田畑の内の二石余を、安永六（一七七七）年に久円（後代の妙音寺住職か）が譲り受けている事実も確認できる。⁽¹⁵⁾一八世紀末段階でも、依然中井本家の強い求心力のもとで一門の土地が管理されており、本家の判断で、扶助すべき「因縁」の者をそうした土地の支配人や一門持ち寺院、村の寺院に配置していたことが知られよう。

以上から、中井本家とその一門のあり方についてまとめておくと、まず一七世紀末までに土地の分与や一門持ち寺院を持つことによって形成された中井家一門の体制は、個々の分家が「株」という形をとることによって、近世を通じて維持されていた。本家は、一門の土地所持や移動、あるいは寺坊の住持や支配人、そしておそらく村役人への就任に関する進退権を、一八世紀後期段階でも事実上持ち続け、一門外へのそれらの流出を防ぐために強力な指導力を発揮する。ただその頃には伊兵衛株のような絶え株や田中家の在地代官退任等もあり、分家・一門の弱体化が進行していたことも事実である。なおこうした一門としての結束は、知行所村においても承認されたもので、一門として存在することで、中井家は、実際の村運営において大きな影響力

を保持しつづけたのである。

（3）一門と在地代官

ところで先にも触れたように、船越方の在地代官としては、同族である田中五兵衛が享保一三年以前に取立てられたのを嚆矢とする。これは、慶長期の船越氏入部以来、田中家が代々庄屋であったことによると考えられるが、その田中五兵衛が、明和九（一七七二）年村の年貢勘定滞りの責任を問われ、代官を退任する。その際滞り銀二八貫目余（四六六両程度）の弁済を受けけたのが中井本家で、⁽¹⁷⁾正清八郎右衛門はその翌年には大庄屋に任命され、確かなところでは寛政一〇（一七九八）年には「御役所」宛の願書を受け取る代官であった。⁽¹⁸⁾中井家から代官が輩出される直接のきっかけは、分家Ⅱ代官の不始末にあったわけだが、そこでは本家Ⅱ中井家の対処のあり方とともに四六〇両余ものこげつきを受けられるだけの経済力が評価されたものと考えられる。

ただ一門というものを前提に考えると、この代官交代ももう少し違った見方ができる。すなわち、中井家が村に対して影響力を持ち、本家のイニシアチブの下で村役人までもが決定されていたとなると、知行主にとっても、中井一門、とりわけ大庄屋であった中井本家を差し置いた代官登用は考えにくいものであったはずである。一方中井家の立場で考えれば、代々村役や石清水八幡宮の神人長職を一門内で受け継ぎ、また土地や寺院も一門の管理下に置いていた。この一門として

管理・継承すべき地位・財産」。「家督」の中には、当然田中家が獲得していた「地方役」に在地代官も含まれていたと考えられ、田中五兵衛の退任とともにそれもまた一門に引き継がれる努力が払われた、という見方ができるのではない。一門である田中五兵衛が代官を退任した際、中井家には、土地や身分・役職の散逸による一門の弱体化、それに伴う村への影響力の低下に対する危機感があつたはずである。本家が滞り銀を肩代わりし、あわせて大庄屋や在地代官の任につくことは、中井一門の「家督」を維持し、村における立場を以後もゆるぎないものとするためには止むをえない処置であつたのであろう。

ところで、こうした身分や地位を含めて「家督」と捉える意識は、世襲状態にあつた在地代官家に共通したものであつた。簡単に旗本石川氏の在地代官壺井家を紹介しておこう。

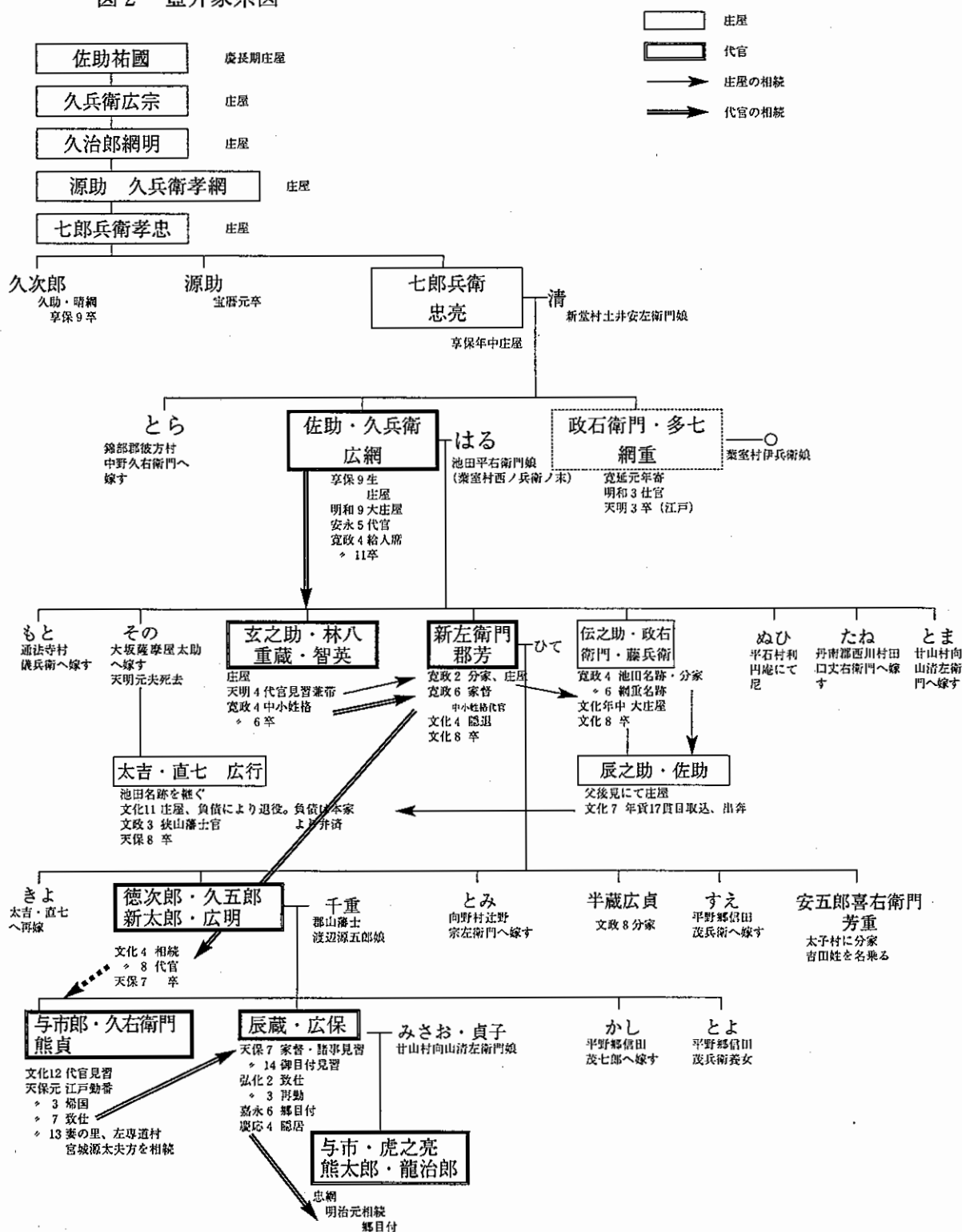
由緒書によると、壺井家は、天正期までは河内の守護畠山氏に仕えていたが、高屋城の落城とともに石川郡葉室村に土着し、その後は「村方先例」によつて、図2に示したように代々同村の庄屋を勤めている。しかし安永五（一七七六）年に広綱久兵衛が大庄屋兼帯代官に取り立てられて以降は、次々と分家が立てられ、また絶家した縁者の名跡（久兵衛妻の実家池田家名跡や弟政右衛門綱重名跡）を取り込んでいくことで、一門を形成していく。ただこの場合は意図して一門を形成したというよりは、むしろ当主「庄屋（大庄屋）」が続いて代官に登用されたため、百姓としての家督を譲る必要から順々に分家が立てられたといった方が妥当で、その結果文化末年までは、庄屋（大庄

屋）・代官共々一門内で相続することに成功している。しかし分家が庄屋を全うすることは容易ではなく、文化期に相続した佐助（辰之助）と直七広行は、共に庄屋としての経営に失敗して村を離れている。いずれの場合も壺井本家が負債を弁済しているが、文化一二（一八一五）年には壺井一門による庄屋・池田家名跡の「相続権」は失われる。

その壺井家の「家督」に明確な変化が現れたのが、郡芳新左衛門から息子広明新太郎に譲られる文化四年頃のことであつた。この時期に書かれた系譜の中では、寛政一二（一八〇〇）年に新左衛門が亡父久兵衛の「家督」に代官役を拝命したと記し、文化四（一八〇七）年の江戸からの任命書にも、「新左衛門跡式」として新太郎に代官見習を仰せ付けると書かれている。²³ 寛政一一（一七九九）年に亡くなった久兵衛が、「好んで奉公を望んではならない」と遺言を残したのとは対照的に、この段階で本家の相続すべき「家督」がすでに代官役を指していたことは確かだ、これと分家の伝えていくべき庄屋役・名跡を合せたものが、壺井家一門の「家督」であつた。この「家督」を守り伝えていくために、本家の強力なイニシアチブのもとで、一門全体として互いに人的補給や経済的援助を行つていったのである。

以上世襲状態にあつた在地代官家の例をみてきたが、こうした代官家の場合、往々にして、小領主的な中井家をはじめとして、壺井家、あるいは数田貫氏が詳細に紹介している同じ旗本石川氏の在地代官壺野家のように、規模はやや小さいながらも、何がしかの由緒を持ち、代々庄屋という家からなる。村において「格別」の立場にあつたこと

図2 壺井家系図



「河内源氏壺井系図略譜」(渡辺家)より作成。

に加え、それを一門で支えあうことで、また比較的安定した経済力を保持しつづけることで、代官の世襲状態は現出されていたのである。

二 頻繁に交替する代官

— 旗本根来氏知行所（近江・大和三四五〇石）の場合 —

（1）代官交替の状況

こうした安定した家に対し、はじめに紹介した根来氏の知行所では、短期間に代官交替を繰り返して、それも代官退任がそのまま家の断絶^{II}農業経営の破綻に繋がるケースがほとんどであった。

表1で説明をしておく、根来氏の大和知行所の場合、⁽²⁴⁾在地代官については、文化末年の松山庄左衛門と右馬理兵衛の頃からたどることが出来る。まず彼ら二人は、代官就任後わずか数年のうちに出奔や知行所不信任で退任しており、その際松山家は断絶、扶持米の返還を求められた右馬家も、すぐには返済できないなど、経済的にはかなり逼迫した状態にあった。かわって取り立てられたのが辻本惣左衛門・吉岡欣十郎であったが、吉岡氏もまた在職中の天保二（一八三一）年に急死する。その時点での吉岡家の所持高は一一石六斗余で、そこからの徳米も八石程度であった。しかも所持地は全て質入れ状態で、欣十郎の急死後は実際に質流れとなっている。代官就任中にどれくらいの土地流出があったかは定かでないが、通常一一石では安定した経営規模とは言えず、すべての田畑が質入されていた事実が何よりもそれを

物語る。ところが吉岡氏のあとを受けて、知行所の入札という方法で代官に抜擢された森本儀右衛門は、比較的安定した経営を行っており、知行所に対し二〇〇両の立替えも行い、また息子富士太郎も続いて代官見習に任用されるなど、一見順調に代官の世襲化が進んだかに見える。しかし十数年後の嘉永三（一八五〇）年には、この森本父子もまた知行所経営の行き詰まりから、知行主から年貢取込・知行所の不正勘定の容疑をかけられ、知行所村々や親類の嘆願にも関わらず、家財没収の上村払いという処分にあっている。

このように根来氏の知行所では、同じ庄屋の取立て代官でも、知行所不帰依や取込、出奔といった形で、突然の退任や家財没収が繰り返され、半数の者が知行所から姿を消している。考えられる理由の一つには、根来氏知行所が大和でも山に囲まれた狭小な耕地しかない地域ということ、生産力の低さと、そこからくる百姓経営・知行所経営の困難さがある。しかし吉岡氏のケースや、同じ根来氏の近江知行所にみられるような村の構造変化を見る限り、それだけが原因ともいえない。つまり、吉岡氏のように一一石しか所持しない者では、村の中で大きな影響力をもっていたとは考えにくく、急死時にすべての財産が知行所の大きな動揺もなく処分されたことを見ても、一門の存在を想定することは難しい。

一方、当時の知行所村内部で起きていた変化を近江知行所の事例で見ると、近江知行所のうち、陣屋が置かれ代々在地代官を輩出していた東老蘇村では、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて村の運

官方法をめぐって長い村方騒動を経験している。それによつて、役屋に独占されていた村運営の民主化が進み、村役人選出にも入札制が採用されていく。同時に、世襲状態にあった代官坪田氏は知行所不帰依のために一時罷免され、かわつて騒動の一方の中心であつた庄屋林氏が代官に取立てられる。また騒動終息の時期に林氏にかわつて代官に就任した杉原氏などは、近世中期に東老蘇村に移住してきた医師であつた。つまり当時の根来氏知行所では、それまでの役屋体制が崩れて、必ずしも家柄や経済力に基づいた庄屋選出は行われなくなつており、また騒動の過程からは、圧倒的な影響力をもつて村の意思を決定してしまうような有力者の存在も見受けられない。先の楠葉村とは違い、比較的フラットな関係が成立していた村⁽²⁵⁾無家格型の村であつたからこそ、こうした民主化への転換が進み、ひいては吉岡氏のような代官も生れたのであろう。しかしそうになると、村の支持は一定得ていても、由緒や一門の存在あるいは経済力を背景に、村や知行所内で突出した影響力をもつ庄屋をたてることも、そうした者を代官に擁立することも、現実にはむづかしいことになる。

また摂津の旗本知行所などでは、知行所の者が一〇年以上代官を勤めれば、「役位⁽²⁶⁾」をかさに様々な「欲念」を起し、少しも百姓のためにならないと言ひ切る庄屋も出てくる。知行所経営の健全化のためには、在地代官が頻繁に交代することこそが必要なのである。中には、知行所百姓の入札で在地代官が決定されるケースもあるが、その場合でさえ十分な影響力を行使しえないままに、勘定不正から知行

所不帰依という事態にいたる者もいる。⁽²⁷⁾無家格型の村から輩出される在地代官の世襲化は、当人の政治的・経済的影響力という点でも、また政治的成長を遂げた知行所百姓の認識の上でも、明らかに困難であつたといえよう。

(2) 代官取立ての事情

では、このように代官就任後の苦難が十分予測される知行所において、庄屋が代官取り立てを受入れるにいたつた事情とは、何であつたのか。

例えば根来氏近江知行所の杉原氏の場合(代々医家)、兄衛守に続いて、弟準平も代官に取立てられている。準平は後年兄の略伝記を著すが、それによれば、兄衛守が江戸から代官就任の打診があつた時、近江知行所の借財はすでに二〇〇〇両にも達しており、代官を受入れるということは自殺行為に等しかつた。しかし衛守は知行主への忠誠心から家族中の反対を押切つて引受け、不眠不休で医業に従事することとで知行所の経営を建て直した、とある。⁽²⁸⁾実際の経営建て直しがどのように行われたかについては検討の余地を残すが、代官になるということが家の経営に直結する一大事で、それでも知行主の命でやむをえず受入れたというあたりは、おそらく事実に近いものではなかつたか。現に同じ知行所内で、五〇石もの土地を持ちながら、病氣を理由に代官取立てを固辞しつづけた庄屋も確認できる。⁽²⁹⁾知行主の要請とはいへ、家の存続に関わる問題だけに、代官受け入れには慎重ならざるをえなかつたのであろう。⁽³⁰⁾

ところで先の杉原氏であるが、近江知行所の財政を建て直し、また知行所村々から「郷中之金持之一番」といわれる程に経営的にも成功をおさめたものの⁽³¹⁾、その後の知行所の「混雑」、具体的には知行所村々の根強い反発や他の代官との軋轢から、弘化三（一八四六）年には、四五〇年前の先祖の「因縁」を語ること、公家の鷹司家の館入になる運動をおこし（「此頃地頭所々色々混雑之義二付、是非御立入願度存心差起」）⁽³²⁾、急速に知行主との間に距離をおくようになる。すべての庄屋が望んで代官登用＝身分上昇を受け入れていたわけではなく、代官登用をむしろ相対化し、家を存続させていくためにそれ以外の道、例えば百姓経営への専念や公家の館入といった、経済的に負担の少ない道を模索していた者もまた少なくなかったのである。

以上、やや極端な事例ではあるが、在地代官家について二つのケースを紹介した。しかし実際には、中井家のように由緒があり一門として存在する代官家、根来氏知行所のように無家格型の村であることから交替を繰り返す代官家、と明確に分かれてはいるわけではない。むしろ圧倒的に多いのが、中井家ほどの一門を形成せず、無家格型に近い村にあつて、経済力も由緒も程々にはあるが、突出したといえる程ではない代官家で、先に紹介した根来知行所の森本家なども、知行所財政の悪化から罷免に追いやられたが、何事もなければ世襲状態も可能であつた例である。そこで次章では、第三のケースとして、こうした世襲化をめざす在地代官家を取りあげることにし、主に経営的側面からその具体像と運動の方向性を見極めることにしたい。

三 世襲化をめざす在地代官家

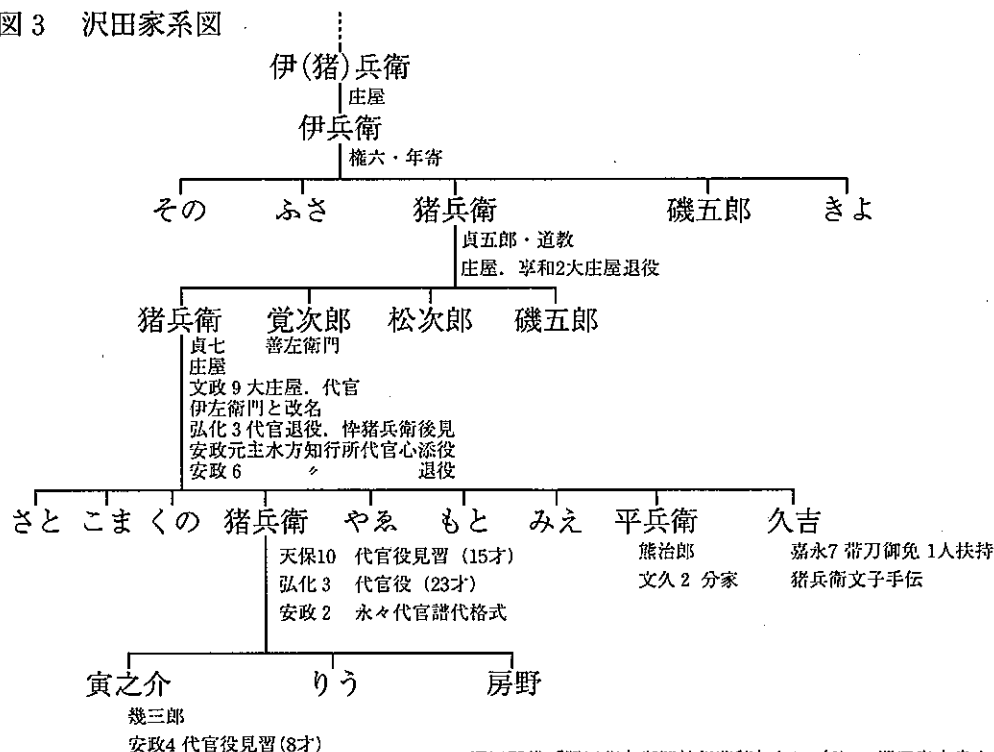
―旗本青山監物方（摂津七〇〇石）在地代官沢田家の場合―

（一）下坂部村沢田家

ここで取り上げるのは、摂津国川辺郡下坂部村の沢田家の事例である。⁽³³⁾下坂部村は、七〇〇石取りの旗本青山監物家と二〇五〇石取りの旗本青山主水家が、それぞれ二〇〇石・三二一石を知行する二給の村で、畿内でも最高の生産力をほこる地域に位置する。両知行所（史料に即して知行所村については、以下組と表現する）の田畑が錯綜する相給村ということもあつて、いずれの百姓も相手組の田畑を多少なりとも所持する（したがって出作率は高い）が、他村百姓の出作はほとんどみられないという特徴をもつ。ちなみに青山監物知行所は、摂州武庫郡の二か村を合せた合計三か村で、また青山主水知行所は、摂州三郡で合せて七か村からなる。

沢田猪兵衛家は、こうした下坂部村にあつて、監物組の村役人を少なくとも享保期以降代々勤めた家であつた。沢田家系図（図3）にあるように、文政九（一八二六）年に初めて代官に取立てられるが、以後明治まで三代にわたつて代官を勤め（三代目は代官見習）、また安政二（一八五五）年から六（一八五九）年にかけては、相知である主水方の代官心添役（事実上の代官）も兼帯している。ただ一九世紀段階の監物方の有力百姓としては、他に太郎兵衛家・庄右衛門家の二家

図3 沢田家系図



沢田正雄「澤田猪左衛門抄伝草稿」(1958年)・沢田家文書より作成。

があった。この三家は、文化期まではともに二〇石前後の土地を所持し、代々交替で庄屋・年寄を勤めている。つまり沢田家とは、代々村役人の由緒はあるものの、比較的経営間格差が小さく、フラットな関係が形成されていた村に無家格型に近い組の在地代官家ということになる。ところが代官任命前後の文政―天保期以降、利貸経営を梃子に急激な土地集積を行い、その経済力を背景に代官の世襲化を成功させている。そこで、まずはこうした沢田家の経営に注目し、経営的側面から代官を輩出することの意味を探っていくことにしたい。

(2) 沢田家の利貸経営

沢田家の土地集積は、その多くについて質入れ証文が確認されることから、利貸経営によるものであったことが明らかである。そこで表3に、確認できる沢田家の利貸の推移を二年おきに示しておいた。以下理解しやすいように、三つの時期に分けてみていく。第1期は、記録が残されている文政三(一八二〇)年から代官に任じられる文政九(一八二六)年までの期間で、庄屋としての利貸が行われた時期。第2期は、文政一〇(一八二七)年から天保一五(弘化元、一八四四)年までの期間で、第1期の貸付を引き継ぎつつ、あらたな要素が徐々に現われてきた時期。そして第3期が、安政三年以降の代官の世襲化が進み、それに応じた貸付が行われたと考えられる時期である。

それぞれの変化を簡単にたどっておくと、まず庄屋時代の文化期から本格化した利貸経営は、代官に任命される年の文政九年に貸付額・人数ともにいったんピークを迎える。そこでの特徴は、何よりも下坂

部「村」を中心とした貸付であった点にある。その場合、内容的には百姓個人への貸付と「村」への貸付に分かれる。

まず下坂部村百姓への個人貸しであるが、一八・九世紀を通して、下坂部村の監物組の人別は一五軒前後、主水組は二四、五軒であったため、監物組百姓は三分の一が、主水組百姓は徐々に増え、ピーク時には半数以上の者が沢田家からなんらかの借入を行っていたことになる。同給の監物組の百姓よりも、むしろ主水組百姓への貸付の多さが目立つが、一口あたりの貸付額が平均二〇〇匁前後（金にして四兩以下）と比較的小額であるのも、こうした百姓への個人貸しの多いことが要因であった。

一方、利貸対象者が複数名で、それぞれの村役人や有力者が名を連ねているもの、「若中」といった集団名が書かれているものを「村」貸しと判断した。その場合、表3に示したように、監物組・主水組、あるいは両組をあわせた下坂部村（それも宮修復銀や若中等に分かれる）というように、様々な種類の「村」に分かれるが、下坂部「村」を越える「村」貸しは行われていない。またこれ以外に近隣他村百姓への個人貸しもあるが、いずれも短期間で返済されるか、特定個人への貸付に止まり、大きな展開はみせていない。このように第1期の主たる利貸対象者は、両組の下坂部村百姓あるいは「村」そのもので、中でも主水組百姓の増加は、村において沢田家が中心的銀主に成長しつつあったことを示唆するものといえよう。

ところが第2期に入ると、文政一三年までは第1期の勢いを継続さ

表3 沢田家利貸変遷表

借入者	第1期			第2期						第3期				
	文政3	文政6	文政9	文政12	天保3	天保6	天保9	天保12	天保15	安政3	安政6	文久2	慶応1	明治2
監物組百姓	6	4	6	5	7	5	4	4	4	6	5	6	5	5
主水組百姓	9	11	17	17	13	14	13	15	13	14	16	15	13	11
監物組	1	1	1	0	1	0	1	1	1	2	1	2	2	2
主水組	0	2	2	2	1	0	0	0	0	1	2	1	0	0
村 宮	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
若中	1	1	1	1	1	1	2	2	2	0	0	1	0	0
両組	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0
監物方知行所	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	2	0	1
主水方知行所	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
他村 個人	5	4	4	3	4	1	3	3	3	7	8	16	14	20
知行所	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	1	1	0
不 明	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	2	2	2	6
合 計	23	24	33	32	28	22	24	26	26	36	43	49	39	46
総貸付元銀額	8144	8998	13756	12939	12521	9556	10455	13936	12192	37648	32064	28733	23530	33955
貸付口数	41	43	62	64	58	40	41	44	48	50	60	65	52	57
平均貸付額(1人)	354	374	416	404	447	434	435	536	468	1045	745	586	603	738
平均貸付額(1口)	198	209	221	202	215	238	255	316	254	752	534	442	452	595

せるが、以後は貸付総額も貸付対象も大きな変動はない。これは、第1期Ⅱ庄屋期の貸付の返済が、話し合いによる年賦返済や担保となった土地の質流れもあつて少しずつ進み、その一方で新たな貸付が押えられたことによる。ただし利貸が縮小傾向にある中で、一人あたり・一口あたりの平均貸付額は上昇している。要因としては、返済が進む一方で、借り増しや滞納分も合せた証文の書き換えが行われたこと、またわずかではあるが、まとまった額の「村」貸しや個人貸しが増えたことがあげられる。第1期の庄屋としての貸付は、第2期で時間をかけて回収され、さらに新規の貸付については、「村」に対してか、個人でも大口のものを対象とする傾向にあつたといえる。

しかしこうした貸付は、第3期に入ると大きく様相をかえる。第2期の終りからわずか一〇年後の安政三年には、すでに貸付額・貸付数ともに二倍前後から三倍にまではねあがつている。また貸付対象も、下坂部百姓への個人貸しは依然継続されるものの、それ以外に監物方・主水方の組貸しや下坂部村以外の両知行所への貸付、さらには周辺他知行所への貸付が見られるようになり、他村の個人貸しも急増している。平均貸付額の高額化は、こうした知行所貸しの増加、個人でも高額貸付の増加を受けたものである。沢田家の利貸経営は、第2期に徐々に現われはじめた変化を、第3期に入つて一挙に加速させ、下坂部「村」の枠を越えたところで、手広く展開されるようになっていったのである。

以上を念頭に、次に具体的に貸付人についてみていくことにしよう。

(3) 貸付人の内容

1 個人貸し

まず個人貸しの対象が具体的にどういった階層の者であつたかを確認するために、表4をあげておく。表4-1は、監物組百姓で、文化六年〜天保一五年の間に一度でも沢田家から借り入れたことのある百姓一〇名が、組の階層構成が明らかな文政二(一八一九)年と天保一

表 4-1 文化6〜天保15年 監物方借入人階層構成表

	文化6〜天保15年(内天保15年借入人数)	天保14年借入人数(内天保15年借入人数)
	人	人
30石〜	1 (0)	2* (0)
20石〜30石	1* (0)	0 (0)
15石〜20石	2* (1*)	2* (1*)
10石〜15石	2 (1)	2 (0)
5石〜10石	0 (0)	3 (3)
1石〜5石	8 (5)	2 (1)
1石未満	1 (1)	1 (0)
不明	(不明2)	(不明2・絶家3)
合 計	15 (10)	12 (10)
総額	135,968石	166,036石

*は庄屋経験者。太郎兵衛は天保期までは年寄。
「名寄帳」・「利銀勘定書」(沢田家文書)より作成。

表 4-2 安政3年主水方借入人階層構成表

主水方所持高	人数(内沢田家借入人)
	人 (人)
30石〜	3*** (2*)
20石〜30石	1* (0)
15石〜20石	2 (2)
10石〜15石	0 (0)
5石〜10石	1 (0)
1石〜5石	11** (7**)
1石未満	6* (5*)
不明	(1)
合 計	24 (17)

四（一八四三）年時点でどこに位置するかを示したものの（一）内の数字）、表4—2は主水組百姓の内、同様に沢田家から借り入れた百姓を示したものである。ただし主水組については安政三年の階層構成しか明らかでないため、安政三年から明治初年までに借入れを行った一七名に限った。

まず表4—1の監物組からみていくと、このうち文政二年の二〇石台の一名は沢田家のため除外するとして（天保一四年では三〇石以上）、監物組百姓の借入れ人は、文政二年は*のついた庄屋経験者と5石以下層に、天保一四年でも一〇石以下層に限定される。一方2の主水組では、三〇石以上の庄屋経験者を含めて全階層にまたがっているが、数の上では五石以下層が大半である。つまり沢田家からの借入人は、庄屋経験者と五石以下層が中心であって、しかも監物組では、文政段階で五石以下層であつた者のうち、半分が、天保一四年段階で絶えないしは不明³⁵無高に転落している。沢田家に両組の五石以下層から土地が流入した可能性とともに、低額貸付の回収が困難であつたことが知られよう。

ただこの五石以下層に限っていえば、土地の流出だけが返済の手段ではなかつた。例えば、本人や家族を日雇・奉公人として沢田家で雇用し、その賃金で元利銀を相殺するケースが組を問わず数例あり、³⁶また文政九年以降になると、「日役」賃で利銀を相殺するケースも出てきている。³⁶「日役」とは、代官の指示で大坂や他村に出される使役のこと、その賃銀は、知行所の支配入用で賄われる。五石以下層

の両組百姓は、農業経営者であり代官であつた沢田家に対し、なにがしかの労働力を提供することで、借入金の一部を返済していたのである。

とはいえ、こうした五石以下層では土地流出とはいってもおのずと限界があり、ましてや種々の給銀で借銀が相殺されていたとなると、沢田家の数十石もの土地集積を彼らへの利貸しで説明することには無理がある。したがって、沢田家の土地集積を知るためには、それ以外の借入人、すなわち庄屋経験者についてもみておく必要がある。

監物組では、庄屋庄右衛門が唯一それにあたる。庄右衛門の場合、文政元年の四〇〇匁を皮切りに、文政九には六五〇匁、文政一三年には九八〇匁を借り入れている。翌天保二年には一部の田地の質流れでいったん四〇〇〜五〇〇匁まで減少させるが、天保一一年には再び一貫目を越える借入を行う。庄右衛門家は、先にも述べたように、沢田家・太郎兵衛家と共に村役人を勤めた家であつたが、他の二家が天保末年には四〇石以上層にまで成長するのに対し、一九石前後に止まり続け、最終的には大半の土地を沢田家に譲り渡すことになる。

その庄右衛門と沢田家の間で取り交わされた天保一〇（一八三九）年の勘定書の内容を示したのが、表5である。当時庄右衛門は沢田家から合計八三〇匁の借入を行っており、Aはそれに対する一年分の利銀の合計である。またBは庄右衛門が立替えて払った勘定で、ここには、村両組で借り入れた宮銀一貫目と監物方の組借り二〇〇匁の利銀、また知行主からの拝借米の利息等が計上され、先の庄右衛門個人の借

表5 天保10年庄右衛門勘定覚

内 容	参 考
36 匁 元 300 目の利	A
12 匁 元 100 目の利	
30 匁 元 250.3 匁の利	
17.28 匁 元 180 匁の利	
95.28 匁	
36 匁 元 1 貫目の利の内両組分	B
30 匁 元 200 匁組内の利	
10.37 匁 御拝借米の利	
0.35 匁 大坂行算用 []	
惣々 172 匁	A+B
内	C
5.41 匁 去成年年貢不足 但し 0.019 石代	
4 匁 巻紙口代	
21.07 匁 岸喜銀取替え引	
93.32 匁 3 村割帳表取替え物引	
引残面	A+B-C
49 匁 不足	
内へ金 3 分 1 朱 代 49.31 匁	
差引 0.31 匁 過渡す	
12 月 27 日	沢田
庄右衛門殿	
外に 3 石 年貢 [] 不足、代 174 匁	
又 79.54 匁 []	
右の通り勘定有之候、合 253.54 匁貸し	

天保10年「利銀寄帳」(沢田家文書 12-53-19)より作成。

入と合せて一七二匁が庄右衛門が沢田家に支払うべき銀になっている。そこからCの沢田家が納めるべき年貢の不足分や庄右衛門が取替えた知行所三か村の支配入用が差し引かれて、最終的に過不足が調整される。Aの庄右衛門名義の借入れが全く個人的な借入れと仮定しても、それと村借・組借の利息や知行所の支配入用、および沢田家の個人的な年貢までもが、まとめて庄屋庄右衛門の元で清算されているのである。

一方主水組庄屋の場合はどうか。安政三年段階(表4-2)での庄屋経験者は七名(内借入人は五名)にもよるが、これ以外に沢田家

から融通を受けていた庄屋経験者に、治左衛門・甚左衛門(ともに文政一一年家出)のいたことが分かっている。ここでは、文政一〇年まで庄屋を勤めた治左衛門の場合を取り上げる。

表6は、沢田猪兵衛がまだ監物組の庄屋であった文政八年当時の治左衛門との勘定覚である。このうち、Dの「渡し分」とは、「大割帳」Ⅱ両組で負担するいわゆる村入用や「年貢」Ⅱ沢田家が主水方にもつ田畑の年貢からなっており、沢田家が相知の庄屋治左衛門に渡すべき銀子とみなせる。それに対しEは、治左衛門が沢田家へ支払うべき銀子で、明らかかなものでいえば、沢田家が取替えた「大割」Ⅱ村入用や「年貢」Ⅱ治左衛門が所持する監物方田畑にかかる年貢、加えて、六〇〇匁・二貫目・二五〇目・二貫目といった四種類の組借の一年分の利息があり、また内容未詳の沢田家取替え分も計上されている。つまりここでも、個人の年貢、村入用、組借の利息すべてが、庄屋治左衛門の手元で清算されており、しかもその残銀は、別の沢田家取替分と合せて、利右衛門Ⅱ主水組相庄屋と連印で新たな組借となっている。ただこうした庄屋同士の勘定では、出作百姓の未進年貢までは対象になっていない。それぞれの庄屋の責任で取立が行われたということであろう。

ところでこの治左衛門は、主水方には天明二(一七八二)年段階で二九石弱を、監物方には文化・文政期に四石弱から五石五斗所持する百姓であった。しかし、主水方では文化四年以前に二、八石余の田地がすでに沢田家に渡っており、文政九年には二、四八石の田地が、監

表6 文政8年青山主水方庄屋治左衛門勘定覚

内 容		参 考
4,145石 代 309,25 匁	大割帳表	D
22,2 匁	宮新八掛り	
米 4石 代 303,31 匁		
内 32,6 匁引		
残 270,71 匁		
年貢 3,4石 代 213,46 匁		沢田家分
ノ 815,62 匁	渡し分	
175,6 匁	大割帳取替	E
4,85 匁	中村与八払	
45,69 匁	年貢	
72 匁	600 目利	
286 匁	2 貫目利	
36 匁	夫代金 250 目利	
216 匁	2 貫目利 神崎銀	
49,78 匁	年中取替	
4 匁	取替	
300 文	山村飛脚賃	
14,75 匁	平五郎一件金屋払	
835 文	平五郎一件九左衛門酒代	
ノ 916,02 匁	手前取替分	
外に平五郎一件造用着代 凡 16 匁かし		F
差引 100,4 匁 かし	極月勘定残り	E-D
外に 10 匁	金屋掛り 甚左衛門・治郎左衛門兩人分割合	G
ノ 110,4 匁 かし		E-D+G
ノ 126,4 匁	極月残り	E-D+G+F
71,1 匁	戊 7 月黒紙取替	
64,8 匁	戊 7 月金 1 両取替	
38,1 匁	渡す	
ノ 300 目	戊 7 月 12 日かし 但し証文入	
		治左衛門・利右衛門連印証文

文政8年「貸附銀利覚」(沢田家文書 12-53-5)より作成。

物方では文政一〇年に三、八石余の田地が沢田家に質流れになっている。また主水方の知行所経営が困難であったためか、周辺村々の銀主からも組借を行い、さらに堺奉行所の公銀借入れのあったことも確認できる。⁽³⁸⁾ 直接にはこの公銀返済の滞りが原因で、文政一年治左衛門は元庄屋甚左衛門共々出奔することになる。沢田家は、治左衛門家とは親戚関係にあったことから、家財の売り立てや種々の借入れの後始末にあたっているが、最終的に治左衛門から主水方二、九八石を、甚左衛門からも監物方四、九一石余を、流質地として受け取っている。

以上、下坂部「村」の二

人の庄屋との勘定を見てきたが、ここから指摘できるのは次の三点である。①「村」の借入に責任をもつのは、監物方にしる主水方にしる庄屋であつて、沢田家は、責任者Ⅱ庄屋に対する貸付は行うが、組入用や村入用を翌年にまでわたって立て替えたり、組の経営を丸抱えするといったことは行っていない。②また「村」貸しの清算は、庄屋との間で年貢・個人借りと併せて行うため、沢田家は庄屋の責任において確実に利銀徴収が行える状況にあつた。したがって、③組の経営状況によつては庄屋に矛盾が集中するため、体力のない庄屋の場合、田畑の大半が質物のかたとして沢田家に流入することになる。

またここから明らかになる沢田家の経営についても触れておくと、沢田家は庄屋との勘定において、支配入用や領主拝借米の利息および沢田家・庄屋家双方の年貢を清算し、一方で五石以下層との間でも「日役」賃等で清算を行っている。つまり沢田伊左衛門が代官になつたことで、個人としては家督を譲り百姓経営からは離れたとはいへ、現実には代官としての入用の出入りも、家の利貸業務・百姓経営も一括して処理されていたことになる。勿論表向きは、利貸経営と代官経営は全く別もので、利貸が沢田家当主（当時は娘名義）の、代官経営は沢田伊左衛門の名前で行われていたものの、内実はそれらは一体のものとして出し入れされていたのである。

2 下坂部「村」貸し

すでに庄屋とのかかわりで、「村」貸しが、沢田家にとつて比較的確実な返済が見込める貸付であつたことを明らかにしてきたが、次に

「村」貸しの内実についてもみておくことにしたい。

下坂部「村」貸しのうち、まず双方の組への貸付は、知行主への「上納銀」や「夫代銀」の取替え等から行われており、また両組貸しⅡ村貸しには、宮の修復銀（宮銀）や若中への貸付、また表3では主水方の個人貸しにカウントしているが、下坂部村唯一の寺院である蓮生寺の修復入用といった貸付も確認できる。こうした「村」貸しは、本来それぞれの村役人や責任者の連名で行われるが、中には組の勘定不足や水利普請入用が庄屋個人の名前で貸付けられる例もある。⁽³⁹⁾庄屋への個人貸しと組貸しの境界は、さほど厳密ではなく、庄屋への個人貸しには組への立替えが含まれていたとみなすべきであろう。

ただ「村」貸しの場合、沢田家の側にもう一つ大きな特徴があつた。それは、「村」に実際に貸し付けられたのは、沢田家の自己資金ではなく、多くが沢田家が他村銀主から借り入れたものであつたということである。例えば文政期のもので、「神崎銀」・「徳永銀」と付記された、それぞれ二貫目・三〇〇目、七〇〇目・一貫目の「村」貸しがある。⁽⁴⁰⁾前者は、近隣の神崎村与治兵衛から沢田家が借入れ、それを主水組へ貸付けたもので、後者は、同じく近隣の旗本船越氏知行所上坂部村の徳永元春から沢田家あるいは太郎兵衛家を通じて、蓮正寺や宮修復銀として村に貸付けたものである。

その場合、本来の銀主への返済は沢田家や太郎兵衛家が行い、「村」や寺は沢田に返済を行っている。一例をあげれば、文政初年に貸し付けられた「徳永銀」からの一貫目の宮銀は、徳永家には沢田家から二

年賦で返済されているが、村Ⅱ両組から沢田家へは明治まで元銀が残る。その際利率は二段階で設定されており、沢田家と村との間では、当時としては平均的な月一歩一朱の約束になっているが、沢田家と徳永家との間では、月八朱がさらに相対で月六朱半まで下げられている。沢田家は、借入れ銀の取次を行うことで利率の差額分を口入れ銀として取得し、しかも沢田家が二年で計一貫一〇〇目を徳永家に支払ったのに対し、「村」は毎年一二三匁を利息として払い続けたため、単純計算では、沢田家は九年で元利銀を回収したことになる。結局明治まで元銀は返済されていないことから、その後四〇年にわたる利息は、すべて沢田家の収益となる。借入れの取次には当然リスクが伴ったものの、負担した元利銀を回収する期間さえ持ちこたえることができれば、取次を行うことは必ずしも経営を圧迫するものではなかったといえる。

ところで表3では、第3期の特徴として、下坂部「村」だけでなく、青山両給の知行所村々、あるいは周辺他給の村々への貸付が急増している事実も指摘しておいた。例えば表7は、いわゆる沢田家の利貸しとは別枠で扱われた、安政三年の監物方三か村への「借出し」の内容である（したがって表3には記載されていない）。文字通り、沢田家が「借」り入れた銀子を知行所に貸し「出し」た一覽で、この時期の取次の特徴をよく示すものである。

まず①銀主は、「万伊」・「古茂」および「大坂伏見屋」といった伊丹・大坂の商人で、借入れ額も一銀主あたり一〇貫目前後と文政期

に比べはるかに高額である。②この場合の「借出し」の目的は、「殿様」への御用金調達、つまりは地頭借りであったため、一〇年賦の約束で知行所三か村の年貢から返納される。③高額の貸付であったためか、知行所に掛る利息は文政期に比べ低率で、沢田家の取得率も五%から一割程度にとどまる。ただ額が大きいことから、この貸付だけで沢田家には毎年二貫五〇〇目程度、およそ三五両の差額が入り、他に口入銀もある。しかも④自身が代官を勤める知行所への貸付で、年貢代銀も管理することから、知行所経営さえ順調であれば確実に返済され、滞ったところで知行所村役人の責任での返済（沢田家からの新たな借入れないし土地流入）が保証された貸付であった。沢田家の経営は、こうした口入によっても確実に拡大していったのである。

表7 安政3年5月沢田家御用金借出し覚

10,900目(156兩)	万伊分	
内 3,493.6匁	但し拙者分かり	6朱半約定
残 7,406.75匁	三か村分8朱半	内1朱拙者へ用捨被下候事 7朱半之約定
9,100目(130兩)	古茂分	
8朱半	内1朱用捨、7朱半之約定	
8,100目(114兩)	大坂伏見屋分	
7朱	内5匁用捨、拙者へ被下、6朱半之約定	
メ28,100目		
元銀28,400匁御下り分		
2,800匁	宛十ヶ年二殿様 被下候事	
右差引300匁過銀二成		
	是ハ口入代ニ成	

沢田家文書12-54-1より作成。

以上、下坂部「村」における沢田家の利貸経営の変遷をたどってきたが、それによって沢田家の経営がどのように変化したかを端的に示すのが、沢田家の所持高である。表8—1・2は、下坂部村の監物組・主水組それぞれの名寄帳とそれへの貼り紙から作成した沢田家の所持高の変遷である。落剥等からすべての土地が網羅できていない可能性もあるが、様子をうかがうには十分であろう。まず監物組であるが、名寄帳の高を見れば明らかのように、安永期から文化期までは、さほど大きな変化はない。しかし△で表したように、土地の流入は利貸を開始した文化期から始まり、流出を示す▲を交えながらも、文政期以降急激に土地集積を行ってることが見て取れる。一方主水組の土地集積は監物方よりさらに極端で、天明期には一石に満たなかったものが、七〇年を経た幕末期には五〇石を越えるまでになっている。なお備考欄には、その土地が誰からの流入あるいは流出であったかを示しておいた。ここから明らかな点としては、①監物組において、庄兵衛や利右衛門（共に主水組百姓）の名前が繰り返し見られるが、これは質流れで流入した土地が、度々元の持ち主に請け返されたことを示す。②同時にこうした土地が他の百姓に譲られるケース（天保二年浅右衛門への譲渡分）もみられ、質流れの土地所持は多分に不安定であった。③また流入者の中には、*印を付けた庄屋経験者が少なくない。そこで表9—1・2に、庄屋経験者とそうでない者にわけて、出入り高を合計しておいた。沢田家の監物組の土地流入は、双方の庄屋経験者からのものが中心で、主水組でも、短期間に頻繁に交代した主

水組庄屋の多くからの流入であったことが明らかである。沢田家の経営拡大は、自身に匹敵する銀主が不在の「村」において、両組の庄屋層（とくに主水組）の土地を吸収する形で進行していったのである。

さてここであつた一九世紀の沢田家の利貸経営について整理しておこう。文化期以降沢田家は、庄屋という立場と高い生産力と商品作物に支えられた農業経営を背景に、庄屋を中心とする下坂部村全体の百姓および「村」に対して、比較的小額の貸付を行う銀主として存在した。それにより沢田家へは、監物組では庄屋から二〇石を越える土地が、また主水組からも庄屋を中心とする三分の二の百姓からの急激な土地流入を実現した。ただし、個人貸しについては自己資金で賄ったが、組借・村借をはじめとする大口の貸付については、周辺の有力銀主から借り入れたものが提供された。その場合、銀主に対しては沢田家が責任を負い、借入者は直接には沢田家に返済を行う。これにより沢田家は、利息の差額や口入銀、後々までの利息を取得することになったが、実はこうした沢田家の口入行為は、他村銀主の下坂部「村」への進入を阻止し、「村」の田畑の他村銀主への流出を未然に防止するという効果を伴ったものでもあつた。⁴⁾ 利貸経営によって沢田家は、「村」や知行所が勘定不正を申立てる余地を残したことになるが、その一方で「村」の要請という側面もそこにはあつたのである。

3 他村貸し

最後に、第3期の特質である下坂部「村」以外の周辺地域への貸付けについても触れておこう。

表8-1 沢田家所持田畑変遷

〔監物方〕

年 代	所持高(石)	備 考
安永10村名寄帳	19.4783	
天明4村名寄帳	23.8307	
文化8村名寄帳	23.5406	
文化12	△1.19	不明
文化13	△0.0435	三四郎(主)
文化13	△1.6414	治左衛門(主*)
文化13	△1.149	彦五郎(主)
文化15	△1.2646	忠兵衛(監)
文政2家名寄帳	26.329	
文政5家名寄帳	26.436	
文政7	△1.6428	庄兵衛(主)
文政10	△3.8538	治左衛門(主*)
文政10	△4.9147	甚左衛門(主*)
文政11家名寄帳	35.2935	
天保2	△4.851	庄右衛門(監*)
天保2	▲0.6973	浅右衛門(太郎兵衛、監*)へ
天保3家名寄帳	39.1973	
天保3	△0.5004	忠兵衛(監)
天保4	△2.8775	利右衛門(主*)
天保5	△2.38	与左衛門(主*)
天保14村名寄帳	41.9423	
嘉永2	▲1.5864	安右衛門(監)へ
嘉永6	▲1.6428	庄兵衛(主*)へ
嘉永6	△0.5878	助左衛門(主)
安政4	△1.6428	庄兵衛(主*)
安政4	△2.463	三右衛門(監)
安政5	▲1.6428	庄兵衛(主*)へ
明治3	▲2.8775	利右衛門(主*)へ
明治5	△12.5818	庄右衛門(監*)
不明	△5.457	太郎兵衛(監*)
	△0.578	治郎左衛門(主*)
	▲0.5004	安右衛門(監)へ
	▲1.19	不明へ

「名寄帳」(沢田家文書)より作成。なお「村名寄帳」は西組それぞれの、「家名寄帳」は沢田家だけの名寄帳。
所持高帳の△は流入した高、▲は流出した高で、備考欄の*は、庄屋経験者であることを示す。
また「主水方」については、貼紙順に記載。()は貼紙以外に沢田家に流入したことが確認できた高。

表9-1 沢田家監物方田畑出入内訳(石)

	*庄屋経験者		非庄屋経験者			
	監物方	主水方	監物方	主水方	不明	合 計
△流入高	22.8898	17.8882	4.228	2.2246	1.19	48.4206
▲流出高	0.6973	6.7631	2.0868	0	1.19	10.7372
合 計	22.1925	11.1251	2.1412	2.2246	0	37.6834

表8-2

〔主水方〕

年 代	所持高(石)	備 考
天明2村名寄帳	0.7284	
追筆	△0.3227	庄兵衛(主)
貼①	△0.2643	弥兵衛(主*)
貼②成	△1.5965	治左衛門(主*)
已	△1.3025	治左衛門(主*)
	△1.4906	治郎左衛門(主)
	△1.729	新左衛門(主)
文政5家名寄帳	11.7445	
貼③文政9	△2.567	伊右衛門(主)
	△2.4813	治左衛門(主*)
貼④文政8	△1.7149	重右衛門(主)
(文政10	▲1.4905	治郎左衛門(主)へ戻す
(文政11	△2.9967	治左衛門(主*))
(文政11か	△1.7396	喜八(主))
(天保3以前	△0.2469	忠兵衛(監))
天保3家名寄帳	11.3548	
貼⑤	△1.427	太郎兵衛(監*)
天保6	△1.95	久五郎(与左衛門、主*)
	△0.0953	三四郎(主)
	△1.87	三四郎(主)
亥	△0.3163	甚左衛門(主)へ九左衛門(監)
貼⑥天保12	△1.5804	蓮王寺(主)へ
貼⑦弘化2	▲0.2771	勝次(勘右衛門、主*)
貼⑧弘化2	△17.1029	勝次(勘右衛門、主*)
貼⑨嘉永1	△0.7635	
貼⑩嘉永3	高 44.4266	庄三郎(主*)
嘉永3	△1.7	庄三郎(主*)へ
貼⑪安政4	▲1.5465	
	高 44.5401	庄三郎(主*)、欠所地入
貼⑫安政7	△3.3655	
	高 47.9406	利右衛門(主*)
貼⑬文久2	△3.5953	利右衛門(主*)
貼⑭文久2	高 52.0609	
	△2.1591	利右衛門(主*)
貼⑮文久2	高 54.22	組内へ越す
	△3.3206	分家平兵衛へ越す
	高 43.4798	
貼⑯明治2	▲7.4197	
貼⑰明治2	△3.5953	利右衛門(主*)へ戻す
	△2.567	伊右衛門(主)へ戻す
貼⑱明治3	高 37.3175	
	▲1.1425	常吉(?)へ
不明	高 36.175	
	△4.42	

表9-2 沢田家主水方田畑出入内訳(石)

	*庄屋経験者		非庄屋経験者			
	監物方	主水方	監物方	主水方	不明	合 計
△流入高	1.427	39.0133	1.8273	10.2396	9.6106	62.1178
▲流出高	0	5.1418	7.4197※	4.3346	1.1425	18.0386
合 計	1.427	33.8715	▲5.5924	5.905	8.4681	44.0792

※ 分家平兵衛へ越す。

第2期後半期にはいったん整理の方向に向かったかにみえる利貸し経営も、安政期に入ると再び活発化する。まず下坂部「村」内への貸付は、監物方百姓や組への口数が増えた程度で、以前と大差はなく、むしろ万延元（一八六〇）年をピークに全体として漸減傾向にある。それに対し新規貸付者を見ると、同給他給を問わず、これまでほとんど見られなかった他村の個人への貸付が四割、他村貸しが二割強と六割を越えるまでになり、しかも個人貸しについては年々増加の一途をたどっている。ただ他村貸しとはいっても、同じ監物方の他の知行所村に対する御用金等の取替え・貸付が最も多く、他に主水方の他の知行所村、また近隣の尼崎藩領神崎村への村貸しも行われた。これらの他村貸しはまとまった額になることが多いものの、貸付期間は比較的短く、一年から長くても数年で返済される。概してこの時期の他村貸しは、臨時上納金のための当座の取替えといった色合いが濃く、在地代官であつたことから必要に迫られた貸付といえる。なおここでも同様に、在郷商人や都市商人から借入れた資金が、沢田家を通して貸付けられている。

一方他村の個人貸しでは、近隣の神崎村・上坂部村・久々知村百姓が多く見受けられるが、いずれも他給村である。その特徴としては、屋号をもち、数貫目に及ぶ高額の借入れを行い、単なる百姓というよりは、何らかの商売を手がけている者が散見される点⁽⁴³⁾があげられる。また下坂部村の者でも「店」と肩書きのあるケースもあり、尼崎の商人が現れるのもこの頃からである。この時期、下坂部「村」および

周辺地域では、百姓の在郷商人化や周辺都市への進出が広範囲に進行し、そうした状況を受けて、沢田家の利貸しの対象も、他村個人の商業活動の融資へと大きく転換したといえそうである。第3期に入ってから沢田家の利貸し経営は、下坂部「村」への貸付を持続しながらも、一方で監物方知行所を中心とする短期の他組・他給村貸し、一方で周辺地域で展開する商業活動のための個人貸しへと両極の方向性を持つようになったのである。

（4）沢田家の経営と在地代官

以上の結果を受けて、あらためて沢田家の利貸し経営と在地代官登用との関係を整理しておこう。

先にも述べたように、利貸しを開始した文化段階の沢田家の経営は、二〇石程度で、決して突出したものではなかった。しかし小口の個人貸付と口入による「村」貸しによって、文政期以降主に庄屋経験者の土地を吸収することで沢田家の土地集積は進行する。文政九年の在地代官登用は、そうした利貸しが急増し、土地流入が本格化した時期の出来事であつた。しかしこの在地代官登用を機に、利貸し経営は徐々に縮小の方向に向う。庄屋を退き代官になったことで、下坂部「村」における利貸し活動の中心が、両組の庄屋の手に移つたためである。つまり沢田家は、代官になることによって、知行所経営への責任は負うものの、「村」や組運営に対する責任からは解放され、以後個人の経営に専念できるようになったのである。

この他にも代官になったことで現われた変化がある。それは代官と

して支払うべき支配入用や「日役」賃、あるいは上納すべき拝借米の利銀等までもが、庄屋個人や借入者の利銀勘定の中で一括して清算されるようになったことである。代官としての銀子のやりとりが、実質的に沢田家の経営の中で行われていたことを示すもので、したがって代官就任によって沢田家の経営体制それ自体が大きく変わるということとはなかったといつてよい。

その後沢田家では、長男猪兵衛も天保一〇年に一五歳で代官見習に、弘化三（一八四六）年には代官役に任命され、安政二（一八五五）年には「永々代官」に任じられるが、その時期になると沢田家の利貸経営の内容も大きく変容する。その一つが、御用金等上納の必要から在郷銀主や都市資本から大口の借入を行い、監物方および主水方知行所、あるいは周辺他給知行所の銀主化していくという方向である。まさに在地代官であったがゆえの貸付であったが、こうした知行所貸しは、特に監物方、また兼帯代官をしていた時期の主水方知行所の場合、代官の裁量で優先的に年貢代銀での返済が行われることから、比較的確実な融資であった。⁽⁴⁾ もう一つは、それとは全く異なる、在郷商人化した百姓を利貸しの対象とするものである。代官の世襲化が進み、「村」運営への責任から脱却したことで、知行所貸しという形で、地域に勃興する新たな在郷商人勢力への貸付けであれ、沢田家には下坂部「村」の枠を越えた活動が可能になったのである。

（5）代官取立ての事情、その後の展開

では、こうした沢田家が代官に取り立てられる経緯とは、どのような

なもので、世襲化が進むことで、沢田家にとどのような変化があらわれたのだろうか。

そもそも監物方の在地代官は、大庄屋も兼帯する「大庄屋代官役」に始まる。その前段階には「大庄屋役」があり、その着任が史料の上ではじめて確認されるのが、享和元（一八〇一）年の沢田猪兵衛（伊左衛門父）であった。翌享和二年には早くも退任しているが、そのあとを受けて大庄屋になったのが武庫郡中村の植村瀧右衛門で、後に代官兼帯に任用されている。文政九年の沢田伊左衛門の代官登用は、植村氏の二代目瀧右衛門の罷免を受けてのことで、一九世紀の知行所支配の中心は、沢田家→植村家→沢田家というコースをたどっていたことになる。

そもそも文政九年の代官交代の発端は、文政三年一月に初代植村瀧右衛門が病死したのち、知行所百姓の入札で決定した二代目瀧右衛門の代官就任を、中村村役人の一部および沢田家を含む下坂部村百姓が不服としたことにある。⁽⁴⁵⁾ 二代目瀧右衛門はまだ年若く、知行所村々の信任を得る人物でもなかったため、入札直後から半数の知行所村役人の間で不帰依運動が起り、伊左衛門も繰り返し江戸用人に退任要求を行っている。しかし請書を提出しながら代官交代を申し立てる伊左衛門らの行動は、かえって江戸用人の不興をかうこととなり、文政四年にはいったん伊左衛門は下坂部村庄屋を退役する（文政七年に再任）。

ところが文政九年春、年貢米を植村氏が不当な安価で売払い、勘定

不正を行ったとして、居村である武庫郡中村の百姓を中心に代官退任運動が再燃する。この事態を受けて江戸用人は、伊左衛門に命じて調査を行い、結果瀧右衛門の不正は明白として解任する。後任に沢田伊左衛門が取り立てられたのは、その年の七月のことであった。

右の経緯から明らかなように、伊左衛門は、入札で決まった植村氏の代官就任を認めないという立場で、一貫して江戸用人に働きかけを行っている。その場合、先代植村氏の大庄屋・代官登用が、父猪兵衛のあとを受けたものであった以上、植村氏退任後の代官登用ということとは十分予測できたはずである。そこに、知行所運営の問題とは別に、今後沢田家をどう発展させていくか、というところでの伊左衛門の判断があったと想定することも可能なのではないか。

ではその結果、沢田家にどのような変化が現れたのか。

一つはすでに明らかにしてきたように、利貸経営の転換であり、加えて在地代官となることで「役位（威）」を身に付けたことである。それによって沢田家は、無家格型に近い村において、徐々にではあるが経済力・政治力（身分）ともに突出した存在へと転身を遂げる。勿論、経済力が蓄積される背景には、代官＝武士であることで守られるという側面があり、また政治力（身分）を発揮する場合も経済力に支えられるところは大きい。二つの側面は、まさに車の両輪の関係として存在したのである。

またもう一つは、沢田家に分家を立て、小規模ながらも一門を形成する動きがみられることである。図3に示したように、沢田家は幕末

期になって三家に分立してい

る。まず代官としての家督は、

二代目代官猪兵衛の長男寅之

介が継ぎ、おそらくこれが本

家である。一方、猪兵衛弟の

平兵衛と長年沢田家当主を勤

めた久吉は、土地の分与を受

けて分家している。ただ表10

の高分けの合計を見れば明ら

かなように（監物組分のみ）、

寅之介の譲り高が最も少ない。

しかし文化六（一八〇九）年

以前・以後、つまり土地集積

を開始する以前と以後の高で

比べると、父祖伝来の高の半分を寅之介が相続し、他の二人は文化六

年以後集積した不安定な土地を中心に相続している。経営の安定性と

いう点で、寅之介がすぐれた相続を行ったことは明らかで、ここに本

家の優位性がうかがえよう。その後久吉は代官手伝いを命ぜられてお

り、平兵衛は質屋仲間になを連ねたり、また分家後は苗字を名乗って

いる。ただ沢田家の場合、庄屋については、伊左衛門が代官に取立て

られた文政九年の段階で放棄され、先にみた壺井家のような庄屋役を

併せた相続は行っていない。

表10 沢田家三家高分け内容（監物方のみ、明治初年頃）

名 前	文化6年以前集積地	文化6年以降集積地	合計
寅之介	9.7994	4.8081	14.6075
久吉	4.3369	20.9395	25.2764
平兵衛	5.8842	13.1765	19.0607
合 計	20.0205	38.9256	58.9446

なおここで代官家と庄屋について少し一般論を述べておけば、代官が世襲化状態になり、安定した知行所運営が行われるほどに、後継者や兄弟もまた代官に登用されることが一般的で、そうすると、代官と庄屋を併せて相続することには当然無理が生ずる。そうすると、一門を抱えている場合は分家に、あるいは経済力を蓄積している代官は、あらたに分家を創出することで、複数の代官役あるいは代官役と庄屋役双方を一門の体制で相続する体制をとる。河内の壺井家がその好例である。勿論こうした分家創出は、経済的成長が著しい一般百姓の場合でも行われる。ただ世襲状態化していく在地代官の場合、分家創出を促すより強い理由があったということである。このように、近世後期の分家創出・一門形成といった動きについては、在地代官家が強力な影響力を形成する一般的現象・運動として捉えることも可能であろう。

以上、経済的成長期に在地代官に取り立てられ、それを梃子に「村」における立場を大きく変えることに成功した沢田家を事例に、世襲化を目指す在地代官についてみてきた。これらの結果を踏まえて、最後に次の二点を指摘して終わることにする。

まず一点は、こうした沢田家の運動が、武士身分を獲得するために展開されたもの、ないしは在地代官として展開されたものではなかったという点である。在地代官登用後、沢田家では分家が立てられたり、代官勘定が家の経営の中で処理されていくが、それらはいくまでも農業経営を行っている沢田家、あるいはその経営スタイルに沿った形で

行われたものであった。つまり沢田家にとって、在地代官取立ての問題、あるいは庄屋を継いで相続するかどうかという問題は、家を今後どのような形で発展させていくか、あるいはどういった形の経営を行っていくか、という発想のなかで選択されたものと理解できる。代官の世襲化が進んだ幕末期にいたっても、沢田家では依然、他村の有力者だけでなく、庄屋太郎兵衛家との婚姻関係を結びつづける。ここに「村」に腰を据えて活動する沢田家の基本姿勢を読み取ることができるとはいえない。

またもう一点は、相知である主水方知行所の在地代官についてである。知行所借財が幕末までみられない監物方とは異なり、主水方では文政期にはすでに借財は嵩み、臨時の上納金もあって、経営的には極度に行き詰まっていた。そのため、家の経営の脆弱さもあってのことであろうが、勘定疑惑や不帰依、あるいは上納金の拒否による罷免という形で在地代官もしばしば交替し、事実上第2のタイプの様相を呈している(表1)。生産力、無家格型の知行所村という点では同じでも、知行所の経営状況によって在地代官のあり方に大きな違いがでてくることにも注意が必要であろう。

おわりに

以上、在地代官を相続の状態から三つに類型化して紹介してきた。最後に類型化することによって明らかになったことを整理しておく。

すでに本文で分て明らかにしてきたように、知行所村においてそれぞれの庄屋家が置かれていた状況によって、在地代官登用を受け入れる理由は三様であった。第一の小領主型である中井家の場合は、卓越した影響力が弱体化することに対する危機意識が背景にあり、第二の無家格型、ないしは無家格型に近く知行所の経営状況が思わしくない知行所村の在地代官は、代官登用を受け入れるにせよ、忌避するにせよ、すでに代官登用されることを相対化している姿勢であったことが、また第三の無家格型に近い村の在地代官沢田家の場合は、経営発展のための手段として在地代官を選択していったことが明らかである。必ずしも在地代官家の事例がこの三つのタイプにあてあまるということではないが、少なくとも弱体化する庄屋、経済的成長を遂げつつある庄屋それぞれに、代官を受け入れる（忌避する）理由があったことだけは確かである。そしてその決断の根底にあったのは、共通して、家としてどういう形で「村」に生き残るかという問題であった。一門を形成していようといまいと、農業経営を基盤とする家が在地代官を選択する場合の根本にはあり、家をどう発展させていくかという視点で代官登用を捉えることはあっても、代官登用＝身分上昇を目標と定め、家をそのための踏み台とする発想は希薄であったといつてよい。中には身分上昇＝武士化を目標とする事例もあるが、家の問題として捉えた場合、決していい結果は得られていない。⁽⁴⁶⁾

なお藪田氏は、旗本石川氏の在地代官塩野家を検討する中で、天保の上知の際に塩野氏が武士としての道をとるか、農としての道をとる

か迷ったことを取り上げて、「〈兵〉か〈農〉か」の間にいた存在として紹介している。⁽⁴⁷⁾しかし、以上の結果を踏まえると、必ずしもそうとは言い切れないのではないか。つまり彼らにとつての問題は、「〈兵〉か〈農〉か」といった二者択一的なものではなく、代官であるところの〈兵〉も、本貫地における〈農〉も、あわせて一門として受け継いでいくべき「家督」＝身分・財産であったのではなかったか。さらに〈兵〉＝帯刀人であることが、大坂町奉行所での返済滞り訴訟を内済に持ち込む効果をもち、⁽⁴⁸⁾また庄屋を退任することで「村」に対する責任から解放されたことを想起するならば、「村」や〈農〉としての経営を現実には防衛する手段という意味合いを帯びていたとも考えられる。したがってこの場合の塩野氏の憂いは、在地代官という一門で受け継いでいくべき一つの大きな身分・立場失うことを思つてのことであつて、決して本貫地から離れ農業経営から手を引くことではなかったはずである。他方代官を相対化するような庄屋家、あるいは代官家であつても、幕末期には、知行主に代わる權威・身分という意味で、公家や禁裏の家来や館入、あるいは神職・郷士等の立場の獲得に急速に乗り出すようになる。表1にあげた在地代官の実に三分の一は、幕末には在地代官でありつつも、一方で婚姻や出入りの関係を形成することでの他の権門に連なる運動を行っている。⁽⁴⁹⁾それらもまた、在地代官を受け入れることと同様、「村」において格別の立場を確保し、家＝農業経営や一門を守る手段として起こされた運動であつたのである。

(注)

- (1) 以下在地代官に関する記述は、拙稿「帯刀人と畿内町奉行所支配」(塚田孝・吉田伸之・脇田修編『身分的周縁』部落問題研究所、一九九四年)・「畿内・近国の旗本知行所と在地代官」(『日本史研究』四二八、一九九八年)による。

- (2) これは、家と在地代官個人との活動を并別せずに評価してきたこれまでの研究(例えば、若林淳之『旗本領の研究』吉川弘文館、一九八七年、川村優『旗本知行所の支配構造—旗本石河氏の知行所支配と家政改革—』吉川弘文館、一九九一年)を克服する必要から、筆者が主に代官個人の権限に着目したことによる。

- (3) 「当村之儀者御料・私領入組候而、御料御高式組二相分り町組・南組与相唱、御知行所者野田組と相唱」(『乍恐愁訴奉申上候』大阪府枚方市米谷家文書11、以下初出を除き所蔵者名のみ記す)とあるように、楠葉村の分郷は、野田・町・南という集落ごとに行われていたようである。

- (4) 「慶長十七年五月訴状写」(大阪府枚方市中井家文書12)。

- (5) なお祐甫以後の神人職の相続や具体的な活動については不明である。ただ明治四年に、「近年出勤等閑」になっていた駒形神人長職の出勤届書の中井家当主が堺県に提出していることから(『乍恐口上』中井家18)、実質的な活動はともかく、当主間で申し伝えはされていたようである。

- (6) 宝永二年六月「一札」(中井家35)・享保三年「見光寺常住物・田畑

水帳写并二宛口次第」(同3)・宝永六年「売渡申山之事」(同72)。

- (7) 田中五兵衛が船越氏家来であることが確認できる最も古い史料が、享保一三年の「大坂袖鑑」(大阪市立中央図書館所蔵写真版)で、その肩書きは蔵屋敷留守居である。

- (8) 「享和三亥年同性祐甫義御尋御座候二付須藤氏へ申上候下書」(中井家148)。

- (9) 寛政五年六月「覚」(中井家66)。

- (10) 安永二年「四年」覚」(中井家53・57)。

- (11) 宝永二年六月「一札」(中井家35)。

- (12) 元禄九年八月四日「妙音寺本末契約之次第」(中井家67・68)。

- (13) 「見光寺常住物・田畑水帳写并二宛口次第」。

- (14) 寛政元年二月「相渡申書付」(中井家45)。

- (15) 明和六年「相渡申田地之事」(中井家92)・明和八年「相渡申田地之事」(同94)・安永三年三月「相渡申屋鋪砂畑之事」(同96)。

- (16) 安永六年二月「相渡申田地之事」(中井家98)。

- (17) 明和九年正月「覚」(中井家29)。

- (18) 寛政一〇年二月「乍恐口上覚」(中井家10)ほか。

- (19) 「壺井久兵衛時代書記」・「河内源氏壺井系図略譜」(大阪府太子町渡辺家文書)。以下、壺井家に関する記述は、特に断らない限り渡辺家文書による。

- (20) 「覚」(渡辺家)。

- (21) 文化四年九月「徳次郎代官見習任命書」(渡辺家)。勿論この間に壺井

家に代々の格式が与えられた可能性もあるが確証はなく、また天保期以降は格下の郷目付を相続するようになる。

- (22) 寛政九年「壺井久兵衛遺言控」(渡辺家)。

- (23) 代表的なものとしては、藪田貫「近世の民衆像―河内・塩野家の父子三代―」(「ヒストリア」一五〇号、一九九六年)・「男と女の近世史」(青木書店、一九九八年)。

- (24) 以下根来氏知行所の記述については、大阪府泉南郡熊取町中家文書および滋賀県愛知郡愛東町福永家文書・滋賀県安土町杉原家文書による。なお根来氏知行所についての詳細は、拙稿「畿内・近国の旗本知行所と在地代官」参照。

- (25) 無家格型の村という表現については、大島真理夫「近世農民支配と家族・共同体」(お茶の水書房、一九九一年)二部第一章を参考にした。なお村の理解については、大藤修「近世農民と家・村・国家」(吉川弘文館、一九九六年)もあわせて参考にした。

- (26) 天保一四年「乍恐口上書ヲ以奉申上候極内々状」(兵庫県尼崎市沢田家文書2―22―2)。

- (27) 旗本青山氏(主水方)在地代官植村氏の例(表1参照)。この件については三で詳述する。

- (28) 「略伝」(杉原家)。

- (29) 「岩田氏用状」(中家⑬―43)・「乍憚口上書」(同⑬―33)。

- (30) 吉岡氏急死後の大和知行所では、後任の人選を知行所百姓の入札で行っている(「江戸用人用状」中家⑤―1―9)。これなどは、本人の意

思決定と知行所の承認問題を一挙に解決させる方法といえる。

- (31) 「岩田氏用状」(中家⑬―43)。

- (32) 弘化三年「鷹司殿御立入雑記」(杉原家)。

- (33) 以下、青山監物方・主水方知行所および沢田家に関する記述は、主に沢田家文書および沢田正雄「澤田猪左衛門抄伝草稿」(一九五八年)による。なお沢田家文書を使った先行研究としては、塩野芳夫「幕末期における中農層の動向」(「ヒストリア」一六号、一九五四年)・「幕末百姓一揆の指導層」(「日本史研究」一九号、一九五三年)・「摂津国川辺郡青山領における滝右衛門一件について」(「兵庫史学」六号、一九五四年、以上の論文は、まとめて「近世畿内の社会と宗教」和泉書院、一九九五年に再録)、小林茂「近郊農村における近世村役人の性格について(続)」(「ソシオロジ」六号、一九五四年)・「明治変革期における農民闘争(一)・(二)」―明治二年十二月摂津国川辺郡十八カ村騒擾の研究―(「ヒストリア」一二・一三、一九五六年、以上の論文はまとめて「封建社会解体期の研究」明石書店、一九九二年に再録)がある。

- (34) 知行所内の在地代官をめぐる対立から、文政四年に一時庄屋を退役するが、文政七年に再び就任している。この間の利貸しが停滞しているのは、その影響であろう。

- (35) 年季奉公で返済しているのは、主水組の宇兵衛・仁兵衛、監物組の彦五郎、日雇銀をあてているのは、主水組寅藏・市藏、監物組さわ。いずれも一石前後ないし無高層である。

(36) 主水組の源治郎・市蔵、監物組の宗七が監物方の「日役」賃で利銀を相殺している。宗七のみ文政段階で一〇石を所持。

(37) 文政九年から一〇年にかけて、一九件もの主水組の組借返済訴訟が沢田家をはじめ周辺村々の銀主から起こされている（「留書」沢田家2—55）。

(38) 以下公銀借入及び庄屋家出については、「御用状写」（沢田家統83）・文政十一年「治左衛門覚」（同統84）、天保二年一月「江戸表御用状留」（兵庫県尼崎市橋本治家文書2）による。

(39) 例えば、主水組庄屋治左衛門名義で「掘貫井戸入用割合銀」の借入があったり、監物組庄屋庄右衛門名義で「村入用」と書かれた借入がある。

(40) 以下の記述は、表3で使用した「利銀覚」の他に、「金銀出入帳」（沢田家12—56—1）・「田地質物差入申証文之事」（沢田家12—66—8）他による。

(41) このような村役人の機能については、「融通のターミナル」という表現で、大塚英二氏によって指摘されている（「村共同体における融通機能の組織化について」（『歴史学研究』五六〇号、一九八六年、後）「日本近世農村金融史の研究——村融通制の分析——」、校倉書房、一九九六年に改稿して再録）。

(42) 例えば文久二年以降上坂部村の姫路屋勝蔵・万蔵名義の借入が三口統けて確認される。

(43) 主水組の浅治郎分に「店利兵衛分」と書かれた借入があり、また尼崎

の「高田屋浅次郎」・「大坂屋兵蔵」等への貸付がある。

(44) この点については、拙稿「在地代官」（久留島浩編『シリーズ近世の身分的周縁5 支配を支える人々』吉川弘文館、二〇〇〇年所収）参照。

(45) この一件については、文化一五年「青山御役所様江諸事願書写帳」（沢田家2—38）・文政四年二月「御役所江願書控」（同2—54）・文政九年八月「郷中願書控并二諸用控」（同2—36—1）による。

(46) 例えば泉州岸和田藩領熊取谷の大庄屋中家は、分家筋にあたる旗本根来氏から瑞運斎を養子に迎えたが、瑞運斎の武士身分への身上がり運動から幕末期の中家は混乱を極める。詳しくは、『熊取町史』本編近世編参照。

(47) 薮田「男と女の近世史」。

(48) 拙稿「畿内・近国の旗本知行所と在地代官」。

(49) 例えば摂津国西成郡下福島村の庄屋であった多田屋は、両替通取引残銀出入で大坂町奉行所に訴えられた際、「禁裏御燈爐鑄造御用」の立場を主張して身体限りを免れ（大阪府市史編纂所蔵江川家文書、支配24）、摂津国高浜村庄屋西田家も館入の由緒を申し立てることで同じ処置を受けている（関西大学図書館編『江戸書状』その一、一九八一年、天保一二年—一三年）。また本論で紹介した中井家の石清水八幡宮や、杉原氏の鷹司家の他に、壺井氏は花山院と、塩野家は神主として吉田家と関係をつなぐことが分かっている。

史料調査に際しては、中井正勝氏・枚方市情報収集課（以上中井家文書）、富田林市役所総務課（渡辺家文書）、熊取町史編纂室（中家文書）、杉原養一氏、国立資料館（高嶋家文書）、尼崎市地域史料館（沢田家文書・橋本治家文書）、大阪市史編纂所（江川家文書）の方々に大変お世話になった。末筆ながら記して謝意を表したい。